岡山大学環境理工学部研究報告
第7巻，第1号，pp.75-89，2002年3月

観光客数の推移からみた岡山県の主要観光地の動向

市南文一*

Tendency of Main Sightseeing-areas based on the Number of Tourists for Some 30 Years in Okayama Prefecture

Fumikazu ICHIMINAMI*

(Received November 30, 2001)

In this paper, the tendency of the number of tourists was examined for some 30 years at several sightseeing-areas in Okayama prefecture. Recently, large-scale parks on well-known theme have been built in Japan, the management strategy of sightseeing-spots is becoming harder. However, it is important for us to understand the peculiarity of local sightseeing-areas and advertise the information on unsophisticated nature and culture linked with surrounding ecological system consistently. Sustainable management of sightseeing-areas is affected and sustained by the thought and life-style of peoples living in the adjacent areas.

Key words : *Tourists, Sightseeing-areas, Sustainable Management, Okayama Prefecture*

1　はじめに

岡山県内の観光地の盛衰は一般の人々にとってかなり常識的で自明なことであるかも知れないが，長期的な期間で検討している事例を，寡聞にして筆者は承知していない．本稿ではそれに関する予察的検討を試み，関連する若干の課題を考察する．より限定して換言すると，この研究の目的は，岡山県の観光地を訪れる観光客数の推定値を指標にして，約30年間の観光地の変化を検討することである．そのうえで，観光地として採るべき方策を若干考察するものである．

21世紀は観光や環境の時代であると言われている．岡山県には旧来，後楽園，倉敷美観地区，蒜山高原などの多様な観光資源が豊富にあり，それらの資源を整備，あるいは開発しながら全国から観光客を引きつけてきた．岡山県では，1989年度以降，農村型リゾート整備事業を開始し，初年度には川上町高山市・高山地区，美甘村河田地区，久米南町山手地区，作東町小房地区，西粟倉村長尾地区の5地区，1990年度には芳井町高原地区，新見市千屋成地地区，中央町大坪和地区の3地域，1991年度には久世町余野地区を指定して観光開発をすすめ，最近ではグリーンホリデイ整備事業と名称を改めて，農山村滞在型交流施設などを整備してきた．

しかし，近年では岡山県内や県外においても，倉敷チボリ公園，ファーマーズ・マーケット（勝央町，灘崎町），ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（大阪市）などのいわゆるテーマパークなどの従来にはみられなかった類型・規模の観光地が多額の公的投資を受けて出現し，観光客の争奪競争が激化している．バブル景気が弾けていたにもかかわらず設立当初の収支計画が甘かったために，多額の累積損出をすでに抱え，経営再建策を立てねばならないチボリ・ジャパン社やおかやまファーマーズマーケット管理運営財団などのような団体の例もあり，長期的に観光客を引きつけ続ける経営を維持していくことは，かなり至難な時代である．地方圏の観光地や近くに百万都市がない地域では，顧客を持続的に吸引することができる規模・内容のサービスの工夫に徹しないと，観光地の経営はもとより，観光施設に従事する雇用の安定もおぼつかなくなる可能性がある．

また，外国から日本を訪問する観光客が，日本から海外に出かける観光客に比較して相変わらず各段に少ないのは，空港の着陸料金などが突出して高額過ぎて，敬遠されているからである．抜本的な経済構造改革を実施して価格を下げないと，観光客が増加する見込みはきわめ

*岡山大学大学院自然科学研究科資源管理科学専攻

て少なく，現在の観光客数の規模を長期的に維持できる可能性すら怪しくなる．観光客はテロ・政情不安・紛争などによる危険度が大きい地域を敬遠するので，日本人の国内旅行の需要は当面伸びる可能性がある．観光地では将来の需要を的確に予測し，工夫してその魅力を持続的にアピールして，観光客を引きつける努力をする必要がある．

観光現象は，観光地の性格や経営・観光客の行動・消費など，多岐に及ぶので，多くの学問分野から研究されてきた．地理学でも古くから，浅香・山村（1974）などが，観光地理学と隣接科学，観光地の性格と発達格差，観光地の諸形態，交通，観光開発と地域計画，自然保護などを包括するテキストをまとめあげる基盤になる一連の研究を展開してきた．以下では個別の論文は省略し，著書の中で観光地理学の主要な研究を簡単に一瞥する．山村（1995）は，日本の観光地理学の系譜を体系的にまとめている．

近年では，浦（1998）が豊富な実地調査にもとづいて手堅い単著を発表しており，同様に佐々木（1998）も内外の多様な類型の観光地調査の成果をふまえて，観光地理学研究の性格と現況を手際よくまとめている．

最近における観光潮流の大きな特色の１つは，都市のみならず農山漁村においても，農産物や景観などの身近な地域の資源を活かしてグリーンツーリズム・エコツーリズム・ブルーツーリズムなどの言葉で主導される地域振興をはかっていることである．これらについては，興味深いさまざまな例が紹介されているが（石原・吉兼・安福編著（2000），脇田・石原編著（1996）など），大都市圏などから観光客を呼ぶためには，その地域に特有の資源に加えて都市住民の嗜好にも合致した観光需要に応えられるサービス機能を備えていなければならないし，観光地と観光客との時間距離もある程度短いことが望まれる．また，溝尾（1994）は，現代の多様な観光地の実態の詳細をバランス良く，しかも勘所をはずさずに読みやすく詳述しているのみならず，観光で地域振興をはかるには基本計画が重要であることを力説している．

中国地方では，野本（1995）が山陰地域を中心とした長年の観光研究をまとめた大作を著している．しかし，岡山県の観光については，観光資源や観光地の研究は十分であるとは言えないように思う．

2　岡山県の観光客の推移

2.1 観光統計

岡山県の観光に関する統計やホームページによれば，県では，観光客数などを推定するにあたり，事前に岡山県内の観光地での実地調査，アンケート調査，およびその他の調査を実施している[1]．

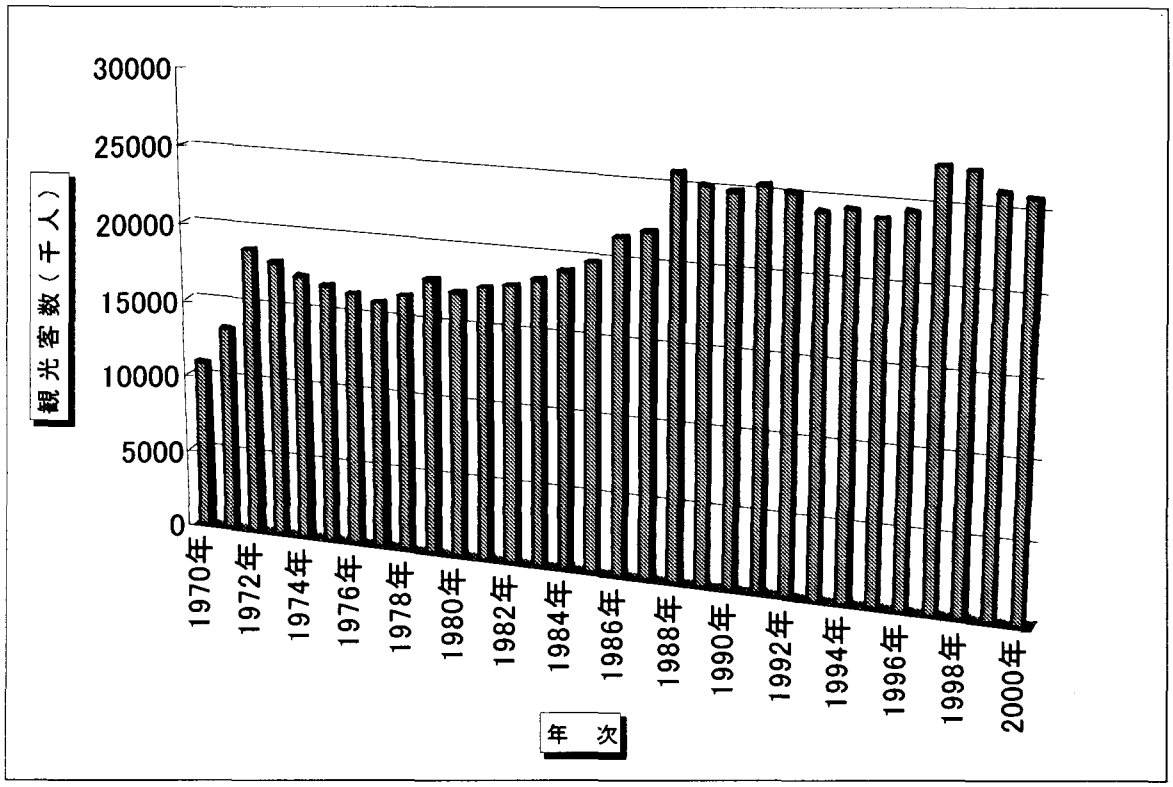
観光客数の統計は指定統計ではないので，どうしても精度が低くなる．鉄道交通が中心であった時代には観光客統計の精度は高かったが，自動車による利用が主体になって，移動経路が複雑・多様になってくると，その精度はおおむね低下していると考えられるので（市川：1985，pp.155-157），観光統計を利用する際には十分な注意を払うことが不可欠である．

しかし，上記のこれらの豊富な調査により，推計に必要な基礎数値の大略はおおむね把握していると判断できるので，最終的な推計手順[2]の詳細には不明な部分があるが，結果として算出・公表されている観光客数は唯一無二の資料であり，信憑性や精度は一定の水準を保持していると好意的に理解したい．この認識を前提にするとともに，市川（1985，p.157）も同一の観光地への入込客の時系列分析については，同時期での観光地間比較よりも難が少ない旨を述べていることから，本研究ではこれらの経年的な資料を利用する．また，可能な範囲で，観光地間の比較を試みる．

2.2 岡山県の観光客数の推移

図－１は，岡山県の観光客数の推移をまとめている．また，表－１は岡山県内の観光地や交通の主要な変化をまとめたものである．1970 年以降の観光客数の数値が出ているが，当初より１千万人を超えており，1972 年には約７割も観光客が増加して一時的に 1,800 万人を突破した．大幅な増加の主原因は，岡山－新大阪間の山陽新幹線の開業であり，大量高速交通機関による効果の大きさがわかる．しかし，1972 年以後，高速道路が各所で開通したにもかかわらず，観光客数は 1977 年まで少しずつ減少し続けた．1975年の山陽新幹線岡山－博多間の開業により福岡・広島・山口県には多数の観光客が流入した結果，岡山県を通過する観光客が増加し，岡山県への観光客数の漸減につながったと考えられる．1977 年以降は再び増加に転じ，1986 年には２千万人を超過し，1988 年には 2,500 万人を超えた．1983年に中国縦貫自動車道が大阪府吹田市から山口県下関市まで全線開通したことが，観光客数の順増を促進し，さらに1988年における新岡山空港の開港と備讃瀬戸大橋の開通により，観光客数は前年よりも約17％(372万人)増加した．観光客数は 1988 年以降増減を繰り返し，最近では 2,700 万人台に達した．1997年には中国横断自動車道の米子－岡山間が開通したことに加え，倉敷チボリ公園の開園が観光客数を大幅に増加させた．

1970 年以降における岡山県の観光客数の推移をふり返ると，観光客数は多少の減少があったとは言え，ほぼ順調に増加し続け，1987 年には 1970 年の２倍以上になり，1997 年には 2.5 倍を超えた．観光客数は，新幹線，高速道路，瀬戸大橋の開通など，交通機関の高速化や利便性の改善が実現されたり，利用できる交通機関の選択肢が大きくなると顕著に増加するが，その後は他地域との競



図－1　　岡山県の観光客数の推移

各年次の岡山県観光物産課「岡山県観光客動態調査」により作成.

表－1　　岡山県内の観光地・交通の主要な変化

年次	主要な変化事項	年次	主要な変化事項
1962	岡山空港（岡山市浦安）が開港	1983	中国縦貫自動車道吹田－下関間全線が開通
1966	岡山城の再建	1983	「あじわいの岡山路」の観光キャンペーンが開始
1967	竹林寺山（鴨方町）に太陽望遠鏡が完成	1987	第1回「津山国際総合音楽祭」の開催
1970	鷲羽山スカイラインの開通	1988	山陽自動車道早島－福山東間の開通
1970	蒜山大山スカイラインの開通	1988	岡山市日応寺に新岡山空港が開港
1972	山陽新幹線岡山－新大阪間の開業	1988	備讃瀬戸大橋の開通
1972	岡山－松山－宮崎の定期航空路の開設	1990	英田町にサーキット場が完成
1974	中国縦貫自動車道美作－落合間の開通	1991	岡山市表町のシンフォニーホールがオープン
1975	山陽新幹線岡山－博多間の開業	1992	中国横断自動車道米子－落合間が開通
1975	中国縦貫自動車道落合－吹田間の開通	1993	山陽自動車道岡山 JCT －岡山 IC 間の開通
1976	中国縦貫自動車道北房－落合間の開通	1993	山陽自動車道岡山－備前間が開通
1977	岡山ブルーハイウェイの開通	1994	第3セクター鉄道「智頭急行」が開業
1978	中国縦貫自動車道、県内全線の開通	1997	中国横断自動車道岡山－北房間が開通し全線開通
1979	倉敷川畔の白壁の町並みが国の伝統的建造物保存地区に指定	1997	おかやまファーマーズマーケットが県南（灘崎町）・県北（勝央町）にオープン
1979	最上稲荷総本山新本殿で 238 年ぶりの遷座式	1997	倉敷チボリ公園が開園
1980	岡山－鹿児島間の航空路が開設	1999	井原鉄道井原線が開通
1982	山陽自動車道備前－竜野西間の開通		
1982	伯備線の電化が完成		

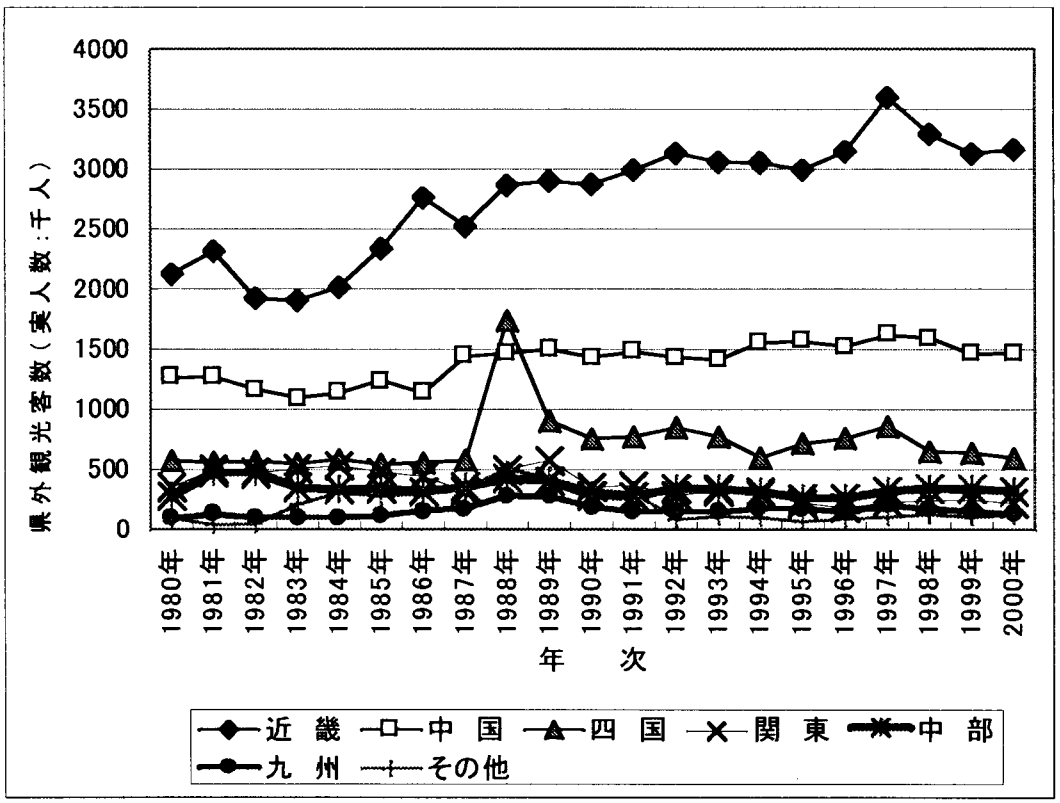
合などにより逓減するという波動を繰り返していると読める．

観光客数を県内と県外に分けてみると，1999年や2000年の数値では，県内からが約54％，県外からが約46％になる．近距離の県内からは半数以上の観光客があるが，県外各地から岡山県へは飛行機，新幹線を含む鉄道，高速道路などで来ることができ，交通の利便性は比較的大きいので，県外からの比率も，県内からの比率と遜色ない数値になっている．

次に、県外に限ってみると，岡山県の観光客はどこから来訪しているのであろうか．図－2は，県外からの観光客数（実人数）の推移を，1980年から2000年まで掲載している．出発地は，「その他」を含めると7区分されている．「中国」地方は，岡山県以外の鳥取・島根・広島・山口の4県である．中国地方よりも，京阪神を含んでいる近畿地方からの方が観光客数は多く，約2倍を示しており，観光客数は中国縦貫自動車道の開通や主要観光地施設の開園などに敏感に対応して推移してきた．最近では1997年の倉敷チボリ公園の開園時における増加が顕著であった．中国地方（岡山県を除く）からの観光客数は次第に増加しているが，近畿地方からの観光客数との差は最近になるほど拡大してきた．四国地方からの観光客数は，1988年の備讃瀬戸大橋の開通時にそれまでの約3倍に増加したが，翌年からは微減傾向にある．しかし，瀬戸大橋開通後の四国地方からの観光客数は，開通前と比較するとかなりの底上げがみられていたが，倉敷チボリ公園の開園後は減少している．他の高速道路と比較してかなり割高感がある瀬戸大橋の高速道路を利用する誘因は，開通時の物珍しさへの憧れと，目的地の魅力の大きさなどであると考えられるが，瀬戸大橋線の鉄道利用の料金は，JR西日本が民営化しているせいか，割高感はないと思われる．それゆえ，近距離の四国から鉄道を利用する観光客が目立って増加していないのは，なぜであろうか．近畿地方向けとは異なる宣伝をするなど，一層きめ細かな工夫が求められるのではないだろうか．

利用交通機関（観光地への最終利用交通機関）別の観光客数の比率を2000年の数値でみると，岡山県全体では自家用車を利用する観光客が最多で約68％，観光バスが約21％，定期バスとタクシーがそれぞれ約1％ずつ，その他が約8％である．

これを主要な観光地ごとに検討するために，年次は1999年になるが，表－2を作成した．原表では，その他を含めて39カ所の観光地の資料が掲載されているが，ここでは，観光地の性格と観光客数の規模（便宜上，30万人以上）を考慮して，その他を除く下記の17カ所に絞った[3]．また，観光客数の規模を効率的に比較するために，図－3に主要観光地別に利用交通機関別の観光客数（1999年）を掲載した．



図－2　　県外観光客数（実人数）の推移

各年次の岡山県観光物産課「岡山県観光客動態調査」により作成．

1991年以前の中部地方は，東海地方のみである．1991年以前の九州地方には，沖縄県が含まれていない．1991年以降の数値は，公表されている延べ人数を1.976で除して実人数に換算した．

倉敷美観地区の観光客数が328万人，蒜山高原の観光客数が257万人以上で突出しており，これらに次いで，最上稲荷・吉備津，鷲羽山，玉野・渋川，湯郷温泉の観光客が多いことが即座に判明する．

表－2によれば，自家用車を利用して観光地に到達する人が最多の割合であるのは，ほとんどの観光地に共通している．これらの比率は，玉野・渋川，王子が岳では9割台，湯原温泉，吉井・ドイツの森，牛窓町では8割台を示すほか，おおむね5割を超えている．自家用車による比率がこれほどまでに高いことから，たいていの観光地では多くの観光客を呼び込むためには，広い駐車場を準備しなければならない訳である．尾瀬や上高地（主に長野県）などのように植生や地形などの貴重な自然の資源が豊富にあって，それらの観光資源を長期的に維持したり，交通渋滞を回避するためには，あらかじめ来訪を計画して事前に予約した人のみを受け入れるなど，多くの観光客の立ち入りを制限する必要がある．このために，自家用車を観光地に至る途中の駐車場で止め，環境保全のためにいわゆる「エコバス」を走らせているような例は，岡山県を初めとする西日本ではあまりみられない．これは観光客数が相対的に少ないためであろうか，それとも自然保護や交通渋滞に関する環境意識が薄いからであろうか．自然保護だけではなく，春・夏・秋の行楽シーズンで好天の土曜日や日曜日には，多くの観光地で自動車の渋滞が発生する可能性がある．このような事態を回避するには，観光地に至る途中で自家動車を駐車場に止め，マイクロバスなどで観光客をピストン輸送するなどの工夫があってもよいであろう．多様化の時代と言われるが，日本の多くの人々の休日は土・日曜に集中しているので，行楽地のピークシーズンの自動車渋滞やこれによる大気環境汚染を緩和するためには，実効性が上がるように，たとえば上記のようなきめ細かな取り組みが求められているのではないだろうか．観光地周辺のソフトな取り組みが、観光地の資源イメージを洗練し、結果的に観光客数が増加し，観光関連産業が発展することが望ましいが，具体的な方策は独自に叡智を絞るなり，他の観光地の長所を取り入れて工夫するなど，地元の活力に依らざるをえない．

自家用車の比率が第1位であることに対する岡山県で唯一の例外は湯郷温泉であり，ここでは観光バスの比率が5割を超え，自家用車の比率は4割台である．実人数でも，観光バスで約46万人，自家用車で約42万人を数える．中国縦貫自動車道路の美作Ｉ．Ｃ．がすぐ近くにあり，遠隔地からでも団体客が高速道路を利用して来訪しやすく，大型観光バス用の駐車場が広く用意されている．

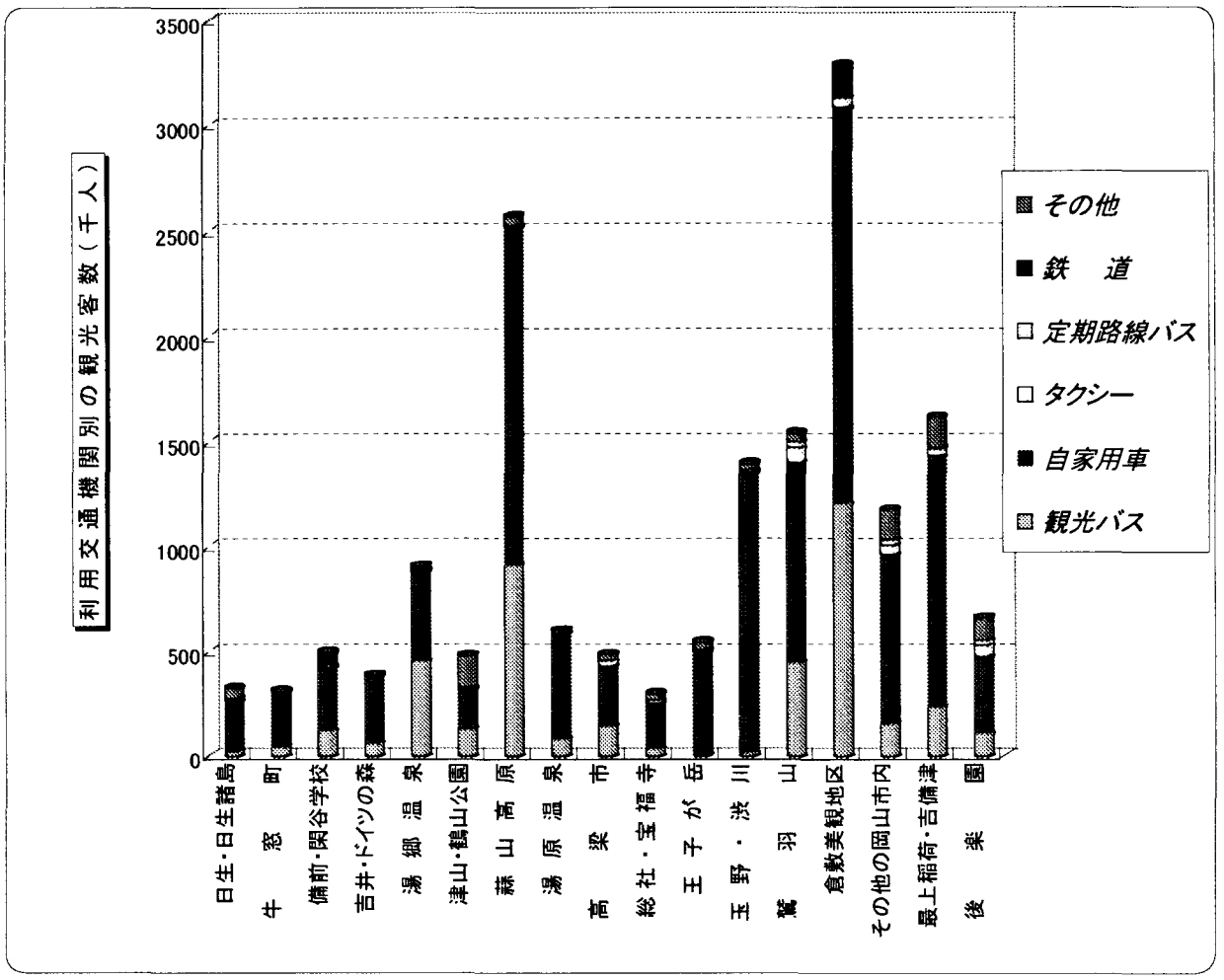
観光バスを利用する比率が高いのは5割台の湯郷温泉を筆頭に，倉敷美観地区（実人数は約121万人）・蒜山高原（実人数は約92万人）・高梁市では3割台を確保しているが，多くの観光地では1割台である．鉄道の利用比率が比較的高いのは，備前市（11.2％），日生・日生諸島（4.6％），倉敷美観地区（4.1％）であるが，他の観光地では鉄道はあまり利用されていない．

タクシーの利用率は高いとは言い難いが，後楽園の来

表－2　主要観光地の利用交通機関別観光客数（1999年）の比率（％）

観光地	観光バス	自家用車	タクシー	定期路線バス	鉄道	その他	観光客数（千人）
後楽園	16.6	55.7	7.4	3.9	0.0	16.4	664
最上稲荷・吉備津	14.8	73.7	2.4	0.2	0.0	9.0	1,620
その他・岡山市内	13.6	67.9	4.2	2.3	0.0	11.9	1,180
倉敷美観地区	36.7	56.9	0.4	1.4	4.1	0.5	3,287
鷲羽山	29.2	61.8	4.5	2.1	0.0	2.5	1,543
玉野・渋川	1.1	95.6	0.4	0.9	0.0	2.1	1,396
王子が岳	0.5	92.3	1.1	0.0	0.0	6.0	546
総社・宝福寺	13.3	69.7	2.0	4.7	0.0	10.3	300
高梁市	30.3	58.6	4.3	0.0	0.0	6.8	488
湯原温泉	14.3	83.1	0.0	1.0	0.0	1.7	603
蒜山高原	35.7	62.1	0.2	0.2	0.0	1.8	2,573
津山・鶴山公園	27.1	38.4	2.3	0.6	0.2	31.4	484
湯郷温泉	50.2	46.4	0.7	0.8	0.7	1.3	910
吉井・ドイツの森	16.1	81.8	0.5	1.5	0.0	0.0	391
備前・閑谷学校	24.6	59.6	1.2	1.6	11.2	1.8	500
牛窓町	14.6	81.5	1.3	0.0	0.0	2.5	314
日生・日生諸島	7.0	72.9	0.3	0.3	4.6	14.9	329

（社）日本観光協会（2001）：「平成11年（度）全国観光動向―都道府県別観光地入込客統計―」から作成．



図－3　利用交通機関別の主要観光地の観光客数（1999年）
（社）日本観光協会（2001）:「平成11年（度）全国観光動向―都道府県別観光地入込客統計―」から作成.

訪者では7.4％である．また，その他の岡山市内，鷲羽山，高梁（たかはし）市では4％台を示しており，悪天候時，多くて重い荷物がある折，観光地付近の細かい「地理」に不案内な場合などに利便性の高いタクシーは，都市部の観光地で重宝されていることがわかる．また，定期路線バスの利用比率も高いとは言えないものの，総社市では4％，岡山市では2％を超えており，貴重な交通手段の役割を担っていると言える．

また，日帰り客・宿泊客別の観光客数の割合を同様に2000年の数値でみると，日帰り客が61％，宿泊客が39％になる．さらに，葉書アンケートにより推計された日帰り客・宿泊客別の観光消費額の比率では，日帰り客によるものが44.5％，宿泊客が55.5％である．1人当たりの観光消費額を算定すると，日帰り客は約4,900円，宿泊客は約9,500円になる．

3　観光地別の観光客数の推移

岡山県内のすべての主要な観光地を一括して同じ枠組みの中で検討することができれば理想的ではあるが，実際には先述したように諸々の理由により，観光統計には資料の精度や信憑性の細かな問題があるほか，著名な観光地から小さな観光地に至るまで網羅的に取りあげることができていない．また，以前には，統計が採られていた観光地のそれが，その後，採られていなかったり，さらに，観光地の名称が変化したり，観光資源の組み合わせが変化したという事例もみられる．新興の観光地には，当然，古い統計が存在しない．以上のように，広域範囲で観光地間の単純な経年比較が困難である事情がある．加えて，県外からの観光客の数え方が実人数方式から延べ人数方式に1990年以降変化した統計もある．よって，一般的な計量分析技法は実際には適用し難い[4]．

そこで，本稿では以上の諸制約を含めて考察を種々繰り返し，検討結果が視覚的になるべく判然な以下の簡便な方式を採った．それは，一長一短があるものの，観光地の数のバランスを考慮して岡山県内を岡山県南（東部），岡山県南（西部），および岡山県北に3区分して検討する方法である．次に，これらの地域ごとに観光地の

観光客数の推移を眺める．

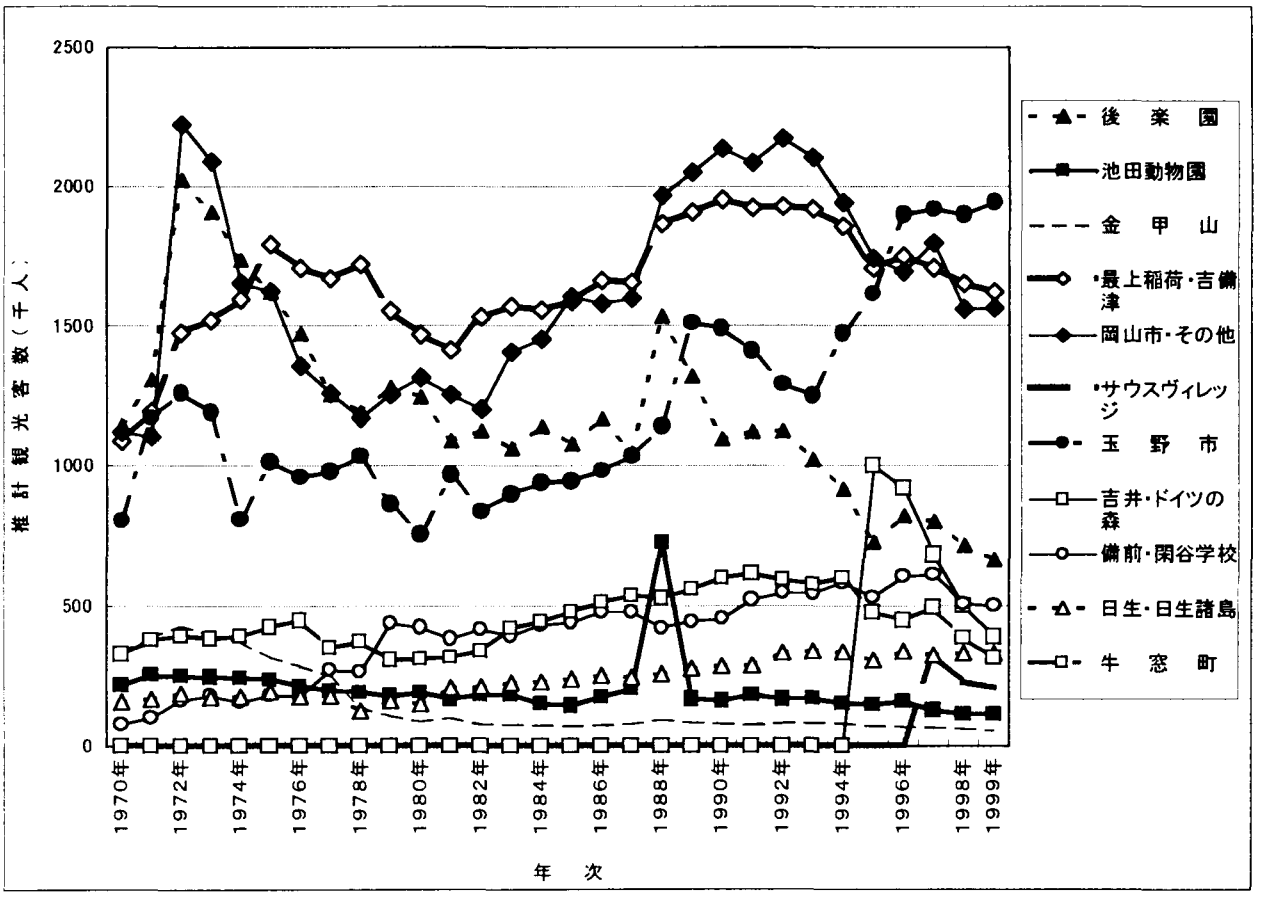
3.1 岡山県南（東部）

図－4は，岡山県南（東部）の主要観光地を訪れた観光客数の推移を示している．ここでの主要観光地は，後楽園，池田動物園，金甲山，最上稲荷（さいじょういなり）・吉備津（きびつ），岡山市・その他，サウスヴィレッジ（灘崎町），玉野市（玉野・渋川，王子が岳），吉井・ドイツの森，備前・閑谷（しずたに）学校，日生・日生諸島，牛窓町である．このうち，海水浴場は岡山市（宝伝，犬島），玉野市（渋川，出崎），日生町（外輪，亀の浦，宮の下），および牛窓町（牛窓，西脇）にある[5]．

後楽園の観光客数は1970年には約114万人余りであったが，1972年の新大阪－岡山間の山陽新幹線の開通年には2百万人を突破した．しかし，その後は1978年の119万人まで減少の一途を辿った．1979・1980年には120万人を超えたが，1981～1987年は100万人から110万人台に低迷した．備讃瀬戸大橋の開通や新岡山空港の開港があった1988年には，後楽園の観光客数は153万人に増加したが，その後は減少傾向に転じ，1994年にはついに100万人を割り，1997年の岡山築城400年記念も倉敷チボリ公園の開園の影に隠れ，1999年には約66万人台にまで落ち込み，2000年に100万人を回復したのが精一杯であった．岡山の後楽園は，水戸の偕楽園・金沢の兼六園とともに日本の3大名園と称され，古来，著名であるが，観光客数はいくつかのピークを形成しながらも，長期的には顕著な減少傾向にある．

最上（高松）稲荷・吉備津は，複数の神社とそれぞれの特有の歴史を誇る宗教観光地である．1970年の観光客数は約109万人であったが，その後は1975年の約179万人まで順調に増加した．1975年以後の観光客数は，1980年代半ばまで150万人前後で推移していたが，備讃瀬戸大橋の開通後から1994年まで180～190万人台に増加した．その後は，160万人台にまで減少している．最上稲荷・吉備津への観光客数に増減の波はみられるが，後楽園のような大きな変動幅はなく，安定した観光客数を維持している．

岡山市・その他は都市観光地であり，県庁付近の美術館・博物館群などの文化施設を含んでいる．観光客数は1970年の112万人から1972年には222万人に一気に飛躍したが，その後は減少して1980年代前半まで低迷した．しかし，1980年代後半になると観光客数は増加に転じ，1989～1993年には2百万人を超えたが，その後は150万人台にまで減少した．



図－4　岡山県南（東部）の推計観光客数の推移

各年次の岡山県観光物産課「岡山県観光客動態調査」により作成．

池田動物園の観光客数は，1970年代前半には20万人を超えていた．その後は10万人台に減少しているが，一定規模の顧客が来訪し続けている．金甲山には1970年代前半までは，30～40万人の観光客数があったが，その後は急減して，1980年以後は10万人以下になっている．

玉野市は海浜観光地であり，1970年代以降は80万人～120万人台の観光客数で推移していたが，1995年以後は150万人を突破して増加してきた．

備前・閑谷学校への観光客数は従来20万人までであったが，1979年以降は40万人を超え，1991年には50万人を突破し，徐々に増加している．日生・日生諸島への観光客数は10万人台で推移していたが，1981年に20万人を超え，1992年には30万人を凌駕し，着実に増加している．

ギリシャ・エーゲ海のイメージが売り物の牛窓町では，従来，30～40万人台の観光客数があったが，1980年代初頭から観光客数が順調に増加し続けて，1986年には50万人，1991年には60万人を超えたが，その後は低迷・減少し続けて1999年には約31万人になった．

吉井・ドイツの森は，1995年の開園時と翌年には90万人台の観光客数を集めたが，その後は急減して1999年の観光客数は約40万人になった．南ヨーロッパ風のイメージで1997年に灘崎町で開園したファーマーズマーケット・サウスヴィレッジでは，開園年には約33万人の観光客数があったが，その後は20万人台に減少している．これらの新興観光地への時間距離は岡山市からは比較的近いが，何度も来たくなるような強烈な特色を主張し続けられるかが，存続していくうえでは重要である．

3.2 岡山県南（西部）

図－5は，岡山県南（西部）の主要観光地を訪れた観光客数の推移を示している．ここでの主要観光地とは，倉敷美観地区，倉敷チボリ公園，鷲羽山，由加山，玉島，総社市，金光町，遙照山・竹林寺山天文台（鴨方町），笠岡・笠岡諸島，井原・田中苑（でんちゅう），弥高山（川上町），高梁市である．このうち，海水浴場は倉敷市（沙実），笠岡市（北木島，白石島，真鍋島）にある[6]．

この地域では，倉敷美観地区の観光客数が飛び抜けて多い．倉敷・水島地区の観光客数は1970年には百万人に満たなかったが，1972年には2百万人を超えた．その後，1977年までは減少したが，それ以降は急増して伝統的建造物保存地区に指定された1979年には3百万人を超え，1988年には5百万人を超えた．しかし，その後は減少の一途で1999年には約329万人になった．

倉敷チボリ公園は1997年にJR倉敷駅のすぐ北側に開園し，1998年には3百万人以上の観光客数があったが，その後は減少したので，早くも経営内容を練り直す事態になってきた．莫大な公的資金を投入するなど，立地・運営計画に関して開園以前に紆余曲折があったことが，結果として明らかになったという醒めた厳しい見方もできるので，今後は顧客の需要を的確に予測して，持続的経営に努めてほしい．

由加山の観光客数の数値は，1987・1988年には30万人を超えたが，20万人台の一定の顧客がある．玉島には1980年代まで20万人台の一定の需要があり，1989年には30万人を超えたが，1990年代には10万人台で低迷している．

鷲羽山ハイランドなどの施設を擁する鷲羽山への観光客数は，倉敷美観地区に次ぐ規模であり，顧客の2大ピークの時期も類似し，備讃瀬戸大橋開通時以後の観光客数の減少傾向も似ているが，1980年前後の観光客数の減少は倉敷美観地区の観光客数のそれとは対照的である．鷲羽山の観光客数は1972年に約198万人になったが，その後は減少して1978～1983年には百万人以下になった．1984年以降，観光客数は急増して1988年には約346万人に達したが，1999年には約154万人まで落ち込んだ．

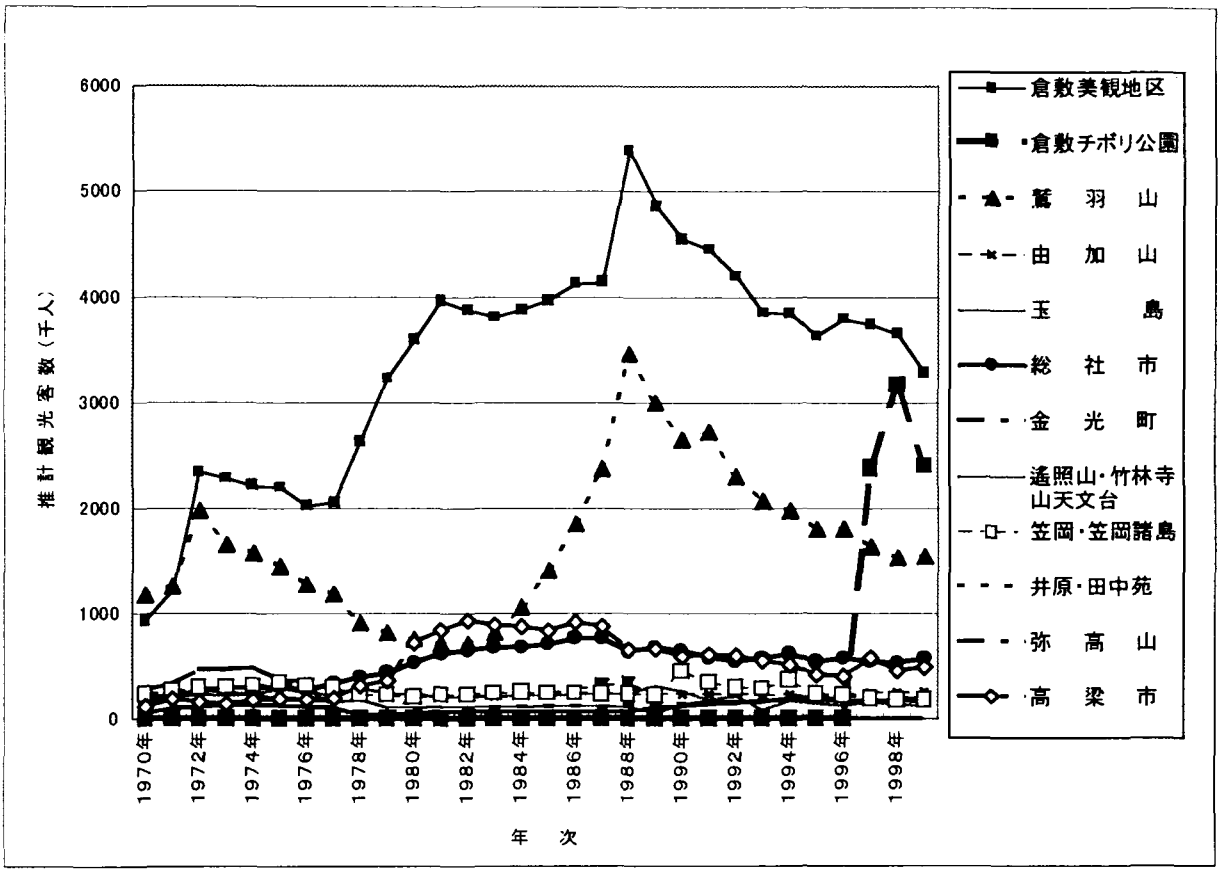
総社市の観光客数は1970年には約20万人であったが，その後は着実に増加し，1979年には40万人を超え，1981年には60万人を超え，1985～1987年には70万人台を維持した．しかし，1990年代には，おおむね50万人台の安定した観光客数で推移した．金光町の観光客数は，1970年代の初頭には約30～50万人を数えたが，それ以後はその他に一括されているため，県統計書への記載はない．遙照山・竹林寺山天文台は1970年代前半には20万人台の顧客を集めていたが，その後は減少しておおむね10万人台の規模を示してきた．

笠岡・笠岡諸島には20～30万人台の観光客数があるが，年次変動は大きくない．1990年には約45万人の観光客数を集めたが，その後は減少し，最近では20万人以下である．井原・田中苑には10～20万人台の観光客数があり，1999年には約23万人を数えた．弥高山には1990年代初頭までは10万人前後の観光客数があったが，1992年以後はわずかずつ増加しており，1999年では約19万人を集めた．

高梁市の観光客数は1970年に約12万人であったが，その後着実に増加して1978年には30万人を超え，1980年には約72万人，1981年には84万人，1982年には93.5万人に伸びた．その後，1987年までは80万人以上を集客したが，1988年には約66万人に落ち込み，1996年の40万人までさらに減少し続けた．最近では，観光客数が若干増加して1999年には約49万人である．

3.3 岡山県北

図－6は，岡山県北地域の主要観光地を訪れた観光客数の推移を示している．ここでの主要観光地は，井倉峡・満奇洞（まきどう）／井倉峡・新見千屋温泉（にいみちや）[7]，勝山町・神庭（かんば）の滝[8]，湯原温泉，蒜山高原[9]，上斎原・恩原高原[10]，奥津温泉，津山・鶴山公園，ノースヴィレッジ（勝央町），



図－5　岡山県南（西部）の推計観光客数の推移
各年次の岡山県観光物産課「岡山県観光客動態調査」により作成．

湯郷温泉（美作町）である．

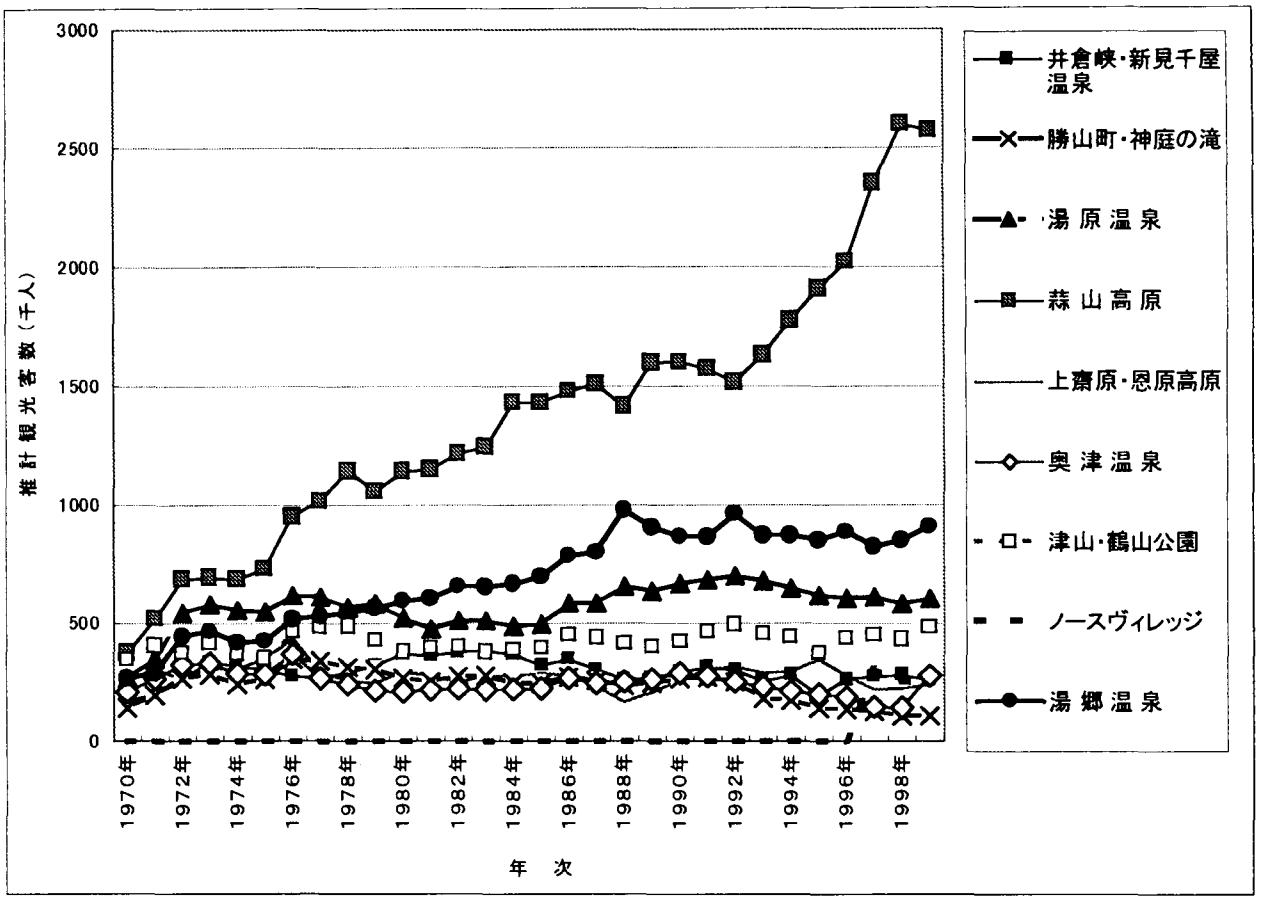
当地域における各観光地を訪れる観光客数は，1970年には最大でも40万人に満たず，観光地間の観光客数の差異は大きくなかった．しかし，年次が進行するにつれて観光客数が増加し，観光地間の観光客数の差異が拡大してきた．当地域の最大の観光地は，西の軽井沢とも呼ばれる蒜山高原で，遊園地・牧場などを初めとする多様な資源を擁している．蒜山高原への観光客数は1970年には約38万人であったが，1972年に約69万人に増加し，吹田から落合まで中国縦貫自動車道が開通した1975年には73万人，翌年には95万人に伸びた．1977年には百万人を超え，その後も順調に増加し1987年には150万人を突破した．中国横断自動車道米子－落合間が開通した1992年以後は，図－6からも明らかなように，観光客数が一層飛躍的に増加し，1996年に2百万人を超え，1998年には260万人に達した．

市域が広い新見市には，井倉峡・満奇洞（新見千屋温泉は1994年から）などの観光地があり，20～30万人台の観光客を集めており，1980年代前半には約36～39万人のピーク期を形成したが，最近の観光客数は30万人に満たない．カルスト台地に点在する満奇洞などはきわめて貴重な観光資源であるにもかかわらず，それらに至る道路幅が狭いので，多数の観光客が大型の観光バスで来訪し難いことが，従来より課題になっている．

勝山町・神庭の滝への観光客数は1970年には約14万人であったが，その後はほぼ順調に増加し，1976年に中国縦貫自動車道が吹田から北房まで開通したので，同年とその翌年には約34万人を記録した．その後，観光客数は減少して1980年代は20万人台で推移したが，1990年代になると10万人台に減少し低迷したままである．

湯原温泉については，平安時代の中期の湯治記録があり，湯原町湯本に泉源を有し，旭川の上流の湯原ダム下の河川敷の「砂湯」が著名である．湯原温泉は，奥津・湯郷温泉とともに美作三湯と呼ばれる温泉群で，近くに足温泉と真賀温泉がある．湯原温泉の観光客数は1970年には約27万人であったが，1972年に50万人を超えた．その後，大きな変動がなかったが，観光客数は1980年代後半から増加し1992年には70万人を超えた．しかし，それ以降は観光客数が漸減して，1999年には約60万人になった．

上齋原・恩原高原への観光客数は1970年には約17万人であったが，その後着実に増加し1976年には43.5万人になった．その後，観光客数が減少し1980年代は20万人台で推移していき，1990年代には30万人台を何度か回復するが，最近では20万人台を示している．奥津温泉では，近世には領主専用の「鍵湯」の存在が知られ，1962年



図－6　岡山県北の推計観光客数の推移

各年次の岡山県観光物産課「岡山県観光客動態調査」により作成．

には藤原審爾の小説「秋津温泉」が映画化されて全国に知られるようになった．奥津温泉の観光客数は20万人台で，顕著な変動はないが，1972・1973・1976年には30万人を超えたことがあった．

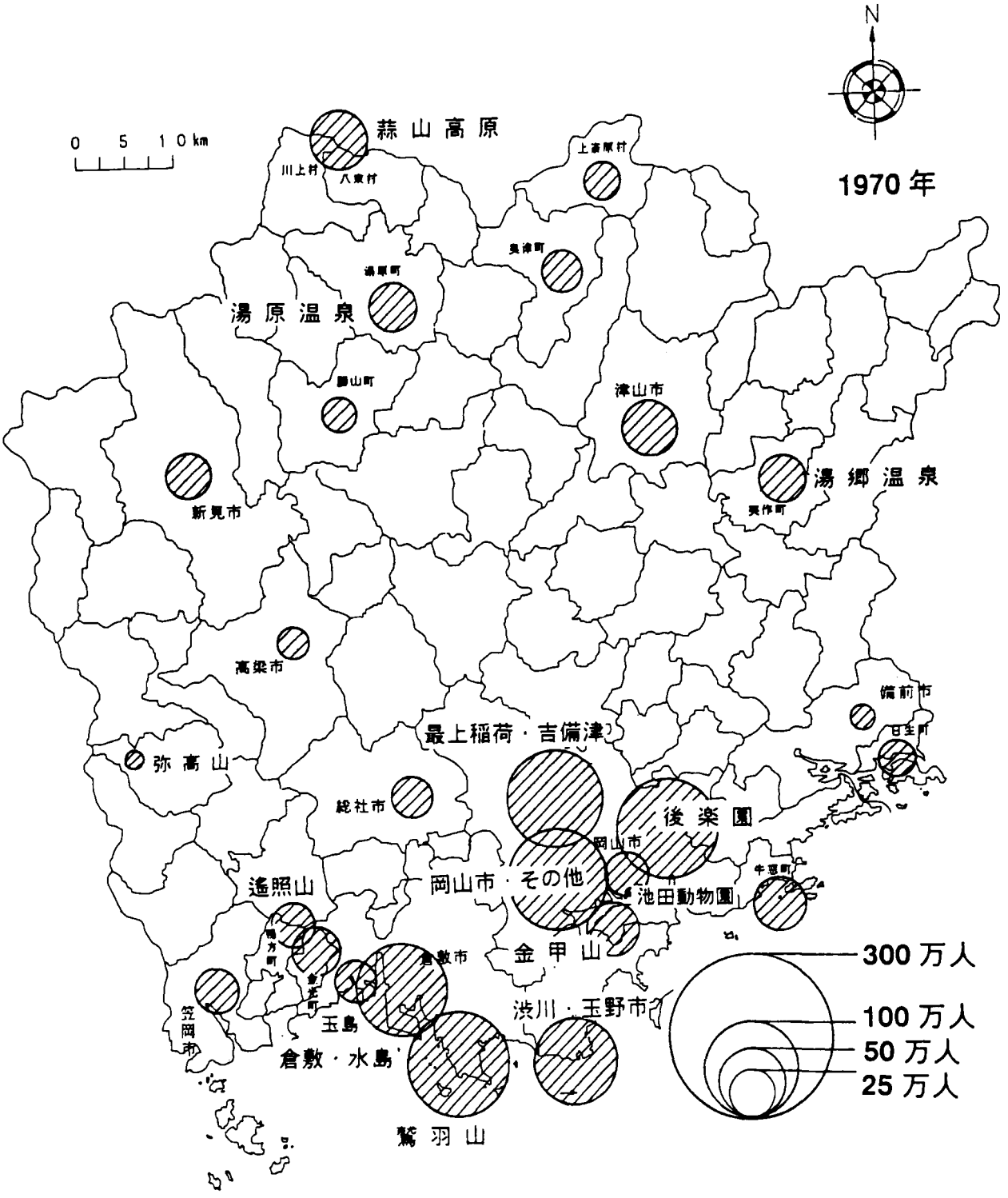
津山市には津山城跡を中心とした鶴山公園（かくざんこうえん）があるほか，衆楽園，箕作阮甫（みつくりげんぽ）旧宅などがある津山城東町並み保存地区，津山洋学資料館などの観光資源がある．津山市への観光客数の経年変化は30～40万人台で推移し，大きな変動や顕著なピークはみられない．しかし，1976～1978年，1986年，1991～1993年，1997年，1999年には45万人以上を記録しており，高速道路の開通などとの関連があるものと思われる．津山市の観光客数は2000年に初めて50万人を超えたが，逆上って考えてみると，多様な資源がありながら，これまで50万人に達していないことが不思議である．今後は，通過観光と言われる短時間の滞在ではなく，時間をかけて楽しめるように観光地の個性や印象を際立たせる方策が求められると思う．

ノースヴィレッジは，北ヨーロッパのイメージで1997年に開園して約31万人を集客したが，翌年以降は25万人に減少している．多額の公的投資をしており，経営の練り直しが早急に要請される．地形の起伏が適度にあり，景観も変化に富んでいるので，一般客の利用の他に，たとえば，学校教育での野外体験・総合学習・外国理解などの場としての利用可能性を一層宣伝すべきであろう．

美作町の湯郷温泉の興りには，平安時代前期の説があり，近世には津山藩の保護で繁栄し，京阪神との結びつきが強い．観光客数は1970年には約27万人であったが，その後はきわめて順調に増加し，1976年に50万人を超え，1981年には60万人，1987年に80万人を突破し，1988年には約98万人の観光客を迎えるに至った．1990年代の観光客数は，80～90万人台で推移し，百万人を超えることができていないが，温泉街には活気があり，美作Ｉ．Ｃ．と温泉街の間の町並みには大規模小売店舗がいくつか立地している．

3.4 岡山県の観光客数の推移

ここでは，3年次（1970年，1985年，1999年）における岡山県の主要観光地の推計観光客数の図を掲載して，その変化を考察する．図－7は，1970年の推計観光客数の分布を示している．約100万人の観光客数がある観光地は，鷲羽山（117.9万人，以下のカッコ内では単位の「万人」は略），後楽園（114.4），岡山市・その他（112.1），最上稲荷・吉備津（108.7），倉敷・水島（93.5）の5カ所で，玉野市（80.3）がこれらに次ぎ，いずれもが



図－7　岡山県の主要観光地の推計観光客数（1970）年

岡山県観光物産課「岡山県観光客動態調査」により作成.

県の南部に位置する．県北では，蒜山高原（37.6），津山・鶴山公園（34.7）が双璧で，美作三湯の湯原（26.8）・湯郷（26.7）・奥津（21）の各温泉がこれらに次いでいた．

図－8は，1985年の推計観光客数の分布を示している．最大は倉敷美観地区（397.6）で，岡山市・その他（160.4），最上稲荷・吉備津（158.6），鷲羽山（140.9），後楽園（107.7），玉野市（94.5），高梁市（83.6），総社市（70.6）の順で続く．牛窓町（48），備前・閑谷学校（44.1）への観光客数も目立つ．県北では，蒜山高原（143）が首位で，湯郷温泉（69.7），湯原温泉（49.7）がこれに続く．津山・鶴山公園（39.4），新見市（32.4）では，観光客数の伸びは目立たない．

図－9は，1999年の推計観光客数の分布を示している．美観地区（328.7）とチボリ公園（241）の2大観光地をもつ倉敷市への観光客数の集中が顕著になった．鷲羽山（154.3）の繁栄は大きく変わらないが，玉野市（玉野・渋川が139.6，王子が岳が54.6）の観光客の増加が顕著である．岡山市内の後楽園（66.4）では観光客数が大幅に減少したが，最上稲荷・吉備津（162），岡山市その他（156.3）には大きな変化はない．県南の備前・牛窓・日生・井原・笠岡・鴨方などへの観光客数の増減は目立たず，新興観光地のドイツの森（39.1）やサウスヴィレッジ（20.5）の観光客数も目立たない．総社市（57.3）や高梁市（48.8）では，観光客数がかなり減少した．

県北では，蒜山高原（257.3），湯郷温泉（91），湯原温泉（60.3）において観客数がかなり増加したことが明らかであるが，その他の観光地では，観光客数に大きな変化がないか，あるいは減少している．

4　おわりに

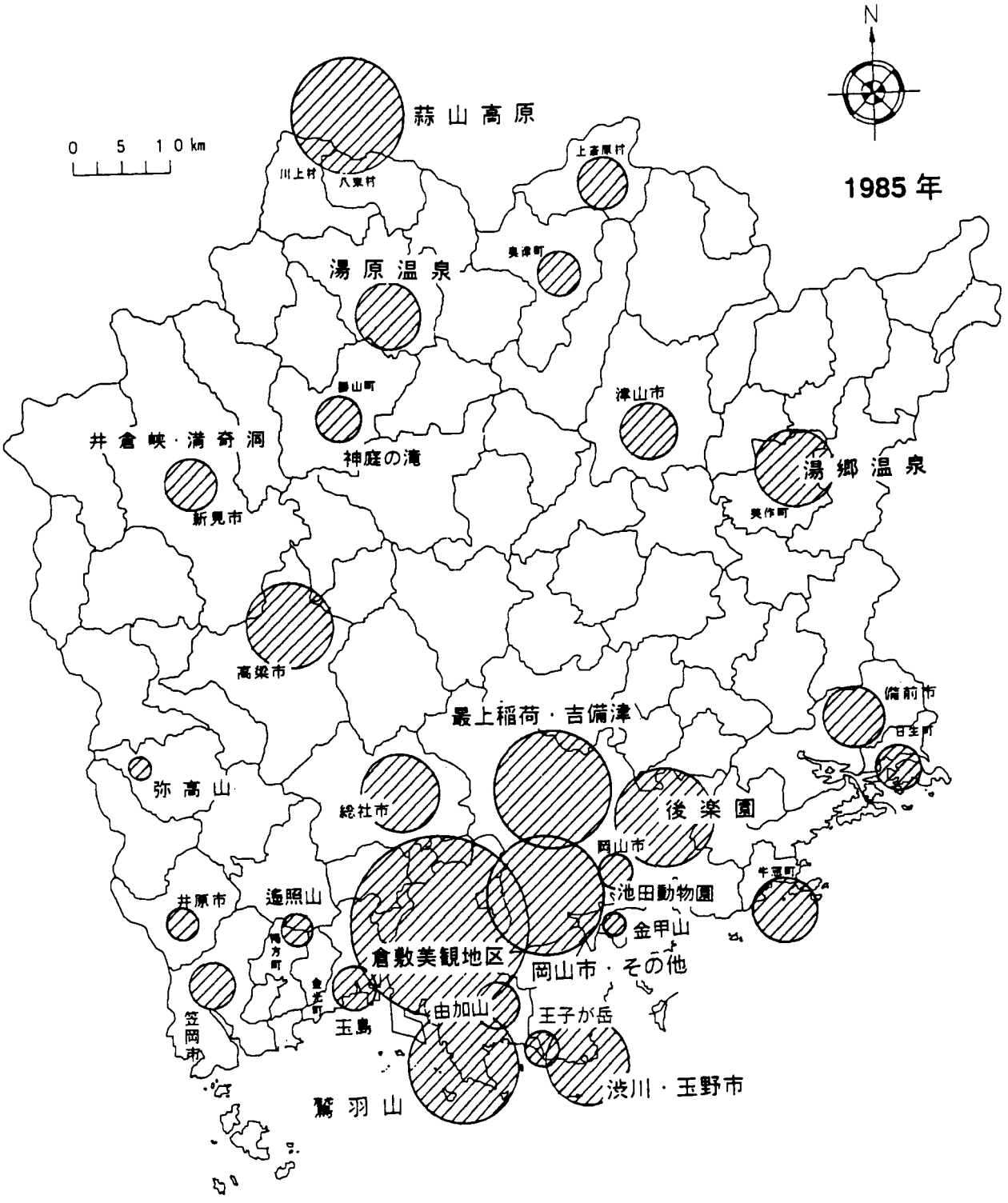
本稿では，岡山県内の主要観光地における推計観光客数から，観光地の推移を検証してきた．山陽新幹線，高速道路，備讃瀬戸大橋のような高速交通手段が整備されると，著名な観光地を訪れる観光客数は，それに対応して一時的にかなり増加するが，その後はたいてい減少する．しかし，県外の人々にはあまり知られていない観光地の観光客数は年間で30万人以下で，大きな変化がない．観光客数が増加し続けて，観光地が持続的に繁栄するならば好ましいことであるかも知れないが，このような事例は実際には稀である．観光客数が増加すれば，その後減少する観光地がほとんどである．減少の真の理由は不明であるとしても，他の観光地との競合は常に存在するので，観光地の魅力の向上につながる経営努力を着実に重ねていかないと，持続的に一定の観光客数を保つことは困難である．一時的に観光投資を集中させることに固執せずに，周囲の状況を判断しながら，観光施設・観光地・観光地域を持続的に運営・経営しようとする工夫が求められる．

近年では，農村型リゾートとして農山村に観光施設を設置して，新しい観光資源・地域を開発し，都市地域との交流を希求している．その際には，旧来の観光地との共存・棲み分けをあらかじめ検討しておかないと，限られた需要を獲得するために過当競争を招きかねない．顧客圏を拡大するためには，観光地の資源をなるべく客観的に評価して，魅力を一層高める努力が必要である．近くに類似的な多くの施設を立地させて競争することは、経営の持続性の点から問題が大きいので，個人経営の喫茶店やレストランなどを自由・無秩序に立地させる訳にはいかない．経営者が協力・調整し合って，人材・資源などの無理・無駄をなるべく最小化できるように，観光地域内で適切に組み合わせることが求められる．

都市住民にとっての非日常性を売り物にするのであれば，農村地域の独自の歴史・文化，たとえば，祭礼や地元で穫れる食材を活かした菓子などの土産品や料理を中心にしながら，個性を強烈に，単純・明快に主張できるのが適切であろう．地域文化の特色を，地元の人々が自覚しながら，多くの人々に愛好される形態に無理なく表現すれば，持続的に運営できる可能性がある．野菜などの食材はもとより，人間をも含めて，地場資源を地元で優先的に流通させて活用する「地産地消」的システムを構築できれば，地域経済が活気づく．しかし，季節に左右されずに周年にわたり，観光客を吸引して繁栄を維持するには，人口が多い都市の近くであっても，魅力を保持するうえでの投資が必要である．しかし，多くの都市地域には珍しい事物・景観を売り物の看板にするのであれば，通常，季節によるある程度の観光客数の偏りは避けがたい．これは，海水浴やスキー場の例と同様に考えてみれば当然の理である．

いわゆる第3セクター的な組織には，責任の所在が不明確であったり，持続的経営に問題がある事例がみられる．今後，必要な場合には，観光施設を建設したり周囲の環境基盤整備をすることは公的機関が担当し，運営は民間組織に委ねる「公設民営」方式を，事前に公募したうえで採用することも，1つの方法である．持続的な繁栄を願うのであれば，利用料金が低廉で，多くの人々が愛着や魅力を感じる内容が求められる．当然，繰り返して，何度でも顧客の利用が期待できるように工夫する必要がある．利用者には遠隔地の人々が含まれるとはいえ，その主体には近距離にある地域や，最寄りの都市部からの人々を想定せざるをえない．

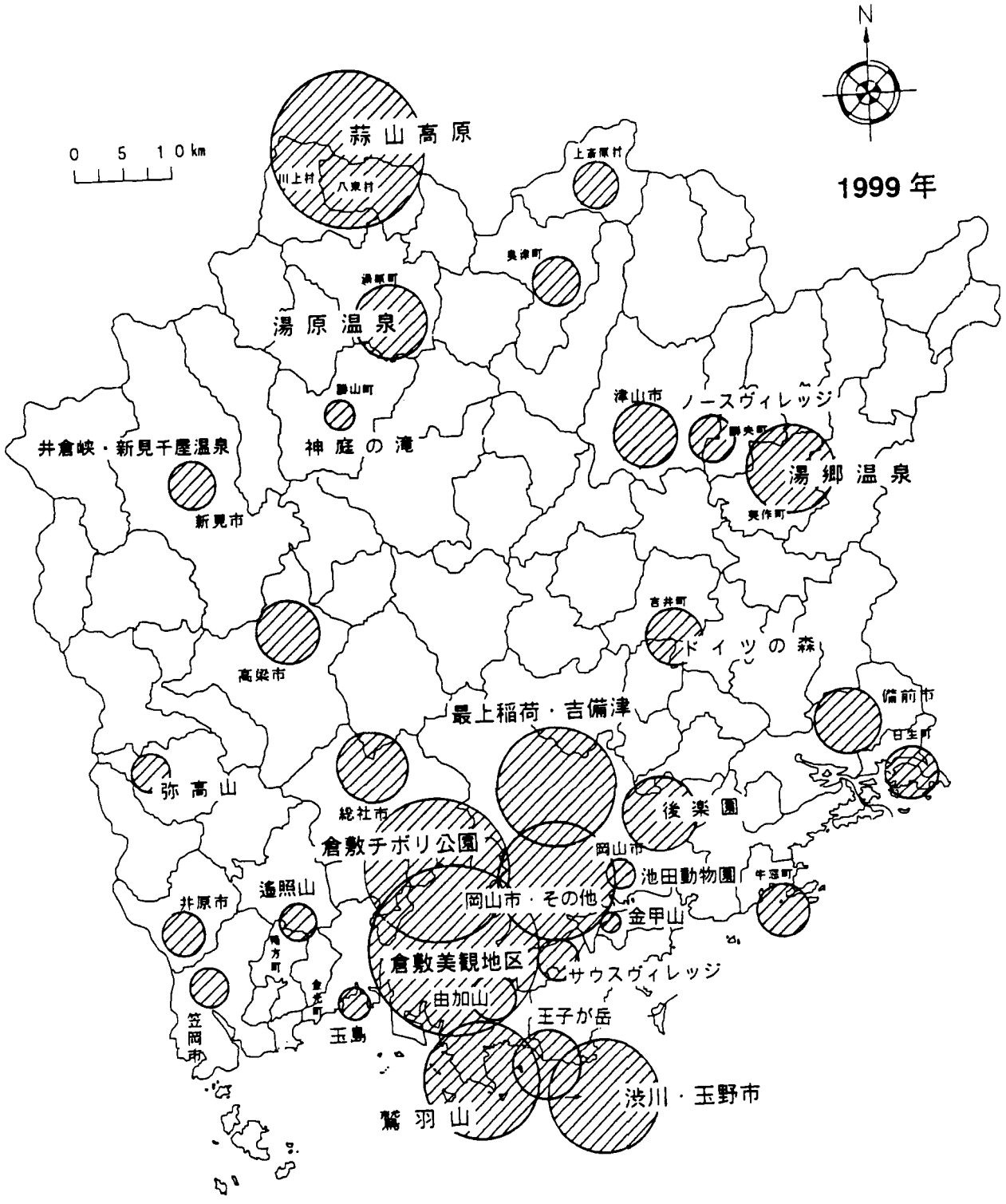
本稿では観光客数の長期的傾向を概観的に検討することを主眼としたが，観光客数の変化の意味を深究したり，小さな観光地をも含めた詳細な分析はできなかった．これらについては，別の機会に譲りたい．



図－8　岡山県の主要観光地の推計観光客数（1985）年

岡山県観光物産課「岡山県観光客動態調査」により作成.

凡例は，図－7と同じ.



図－9　　岡山県の主要観光地の推計観光客数（1999）年
岡山県観光物産課「岡山県観光客動態調査」により作成．
凡例は，図－7と同じ．

注

1）実地調査は，48カ所の主要観光地で、2・5・8・11月のそれぞれ2日間にわたる入込客数などを調べており，アンケート調査では上記の48カ所に加えて倉敷チボリ公園，南北ファーマーズ・マーケットで，消費額・経由地などを調べている．また，その他の調査では，有料観光施設への入場者数，海水浴場・キャンプ場・スキー場の入込客数，公的宿泊施設の利用者数などを調査している．

2）代表的な推計方法として，たとえば，緒川（2001）などに詳細な説明がみられる．

3）「その他の岡山市」とは，ここでは後楽園，池田動物園，金甲山，最上稲荷・吉備津，ＲＳＫバラ園，岡山城以外の観光地を意味する．また，閑谷学校と備前は別々に集計されているが，ここではこれらを合算した数値を示した．

4）観光客数の経年的資料にもとづいて，観光地を分類する作業もいくつか試行したが，データ行列の特性により逆行列が求められない場合が発生したり，意味ある解釈ができなかった．

5）平成11年の入込客数は，宝伝（３万人），犬島（2,500人），渋川（369,730人），出崎（13,792人），外輪（2,025人），亀の浦（300人），宮の下（3,550人），牛窓（10,862人），西脇（23,085人）であった．渋川海水浴場への入込客数が多いのは，一般の海水浴客のほかに，県内の学校教育における児童などの研修がほぼ周年的に実施されているからであるものと考えられる．

6）平成11年の入込客数は，沙美（73,070人），北木島（1,800人），白石島（8,800人），真鍋島（2,300人）であった．

7）「井倉峡・新見千屋温泉」は，1980～1994年については「井倉峡・満奇洞」，1995年以降は「井倉峡・新見千屋温泉」による数値である。また，新見市には古くから千屋スキー場があり，平成11年から平成12年にかけての冬季の集計では，3,200人の入込客があった．

8）「勝山町・神庭の滝」は，原資料では1980年以降，「神庭の滝」と表記されている。

9）蒜山高原の川上村には，郷原，三木ケ原，ひるぜんベアバレーのスキー場があり，平成11年から平成12年にかけての冬季の集計では，計33,749人の入込客があった．また，ほかにも八束村（上蒜山），中和村（津黒高原）の各スキー場があり，同時期の入込客数は，それぞれ，15,295人と16,504人であった．

10）上齋原村には恩原高原スキー場があり，平成11年から平成12年のシーズンでは95，956人の入込客数を数え，岡山県内のスキー場への入込客では他のスキー場のそれを大きく引き離して最多である．

参考文献

浅香幸雄・山村順次（1974）:「観光地理学」，大明堂．234p.

石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編著（2000）:「新しい観光と地域社会」，古今書院，121p.

市川健夫（1985）:「フィールドワーク入門　地域調査のすすめ」，古今書院，242p.

浦　達雄（1998）:「観光地の成り立ち－温泉・高原・都市－」，古今書院，190p.

緒川弘孝（2001）:第４章　観光基礎資料の作成技法．pp.4-1－4-33.（株）リージョナルプランニング編「これからの観光地域づくりのための手法」，（社）日本観光協会．

佐々木　博（1998）:「観光と地域」，二宮書店，271p.

野本晃史（1995）:「山陰の観光地理　観光地域形成の諸条件と地域整備」，山陰観光研究会，767p.

溝尾良隆（1994）:「観光を読む　地域振興への提言」，古今書院，206p.

山村順次（1995）:「新観光地理学」，大明堂，270p.

脇田武光・石原照敏編著（1996）:「観光開発と地域振興グリーンツーリズム　解説と事例」，古今書院，165p.